

# ウィーンのおペラ・ハウスに おけるバレエの近代化

—ハインリヒ・クレーラーを中心に—  
Heinrich Kröllner  
(1880München—1930Würzburg)

古後奈緒子 (大阪大学大学院)

ドイツ、オーストリアの歴史的モダン・ダンスの活動は、20年代に大劇場における芸術的展開を遂げ、オペラ・ハウスのバレエ改革とも結びついた。その成果は、モダン・ダンスがもたらした新しい舞踊スタイルやバレエのシステムの活性化にとどまらず、舞台舞踊作品のドラマツルギーや、それにまつわる諸技芸（音楽、舞台美術、照明など）の再吟味にも及ぶ。このような、モダン・ダンスとクラシック・バレエの伝統の交通の先駆的存在である、ハインリヒ・クレーラーの【近代的コレオグラフィー】の試みと、そのウィーン国立歌劇場におけるバレエ改革との接続を、『ヨセフ伝説』を例にまとめる。

クレーラーは、ドイツ文化圏において、オペラ・ハウスに初めてモダン・ダンス教育を導入し、リヒャルト・シュトラウス、ヒューゴ・フォン・ホフマンスタールの製作のバレエ作品『ヨセフ伝説』のドイツ文化圏における上演を、成功裡にもたらしたバレエ・マスターとして知られる。1915年以降、フランクフルト、ミュンヘン、ベルリン、ウィーン国立劇場に活動の場を与えられ、それぞれ就任地で、興行的に衰退していたバレエ部門のたて直しに成功した。前世代のバレエとは画するバレエ製作の試みは、『ヨセフ伝説』に以下のように認められる。

1. 筋立てバレエにおける舞踊と筋の分離を、有機的な作品構成によって解決。
2. すべての動きに、筋による動機づけ、または、主題と関連した象徴的な意味を与える。
3. クラシック・バレエのバのアレンジではなく、独自に動きを考案。さらに、それらを人物像や象徴内容の違いに対応させて、クラシック・バレエのバも含めた新旧様々な舞踊スタイルと併用する。
4. 音楽、衣装、舞台美術、照明など、他の舞台芸術も、筋に適した意味を担う。

以上の点には、度々共同制作に携わるホフマンスタールの、パントマイム舞踊としてのバレエ構想との親近性が、最も色濃く見て取れる。筋はこびの自然さと筋に裏打ちされた演技の称揚には、文学オペラの成功による、オペラ・ハウスの観客へのリアリズムの浸透を背景にしている。また、クラシック・ダンスのステップをアレンジするので

はなく、独自のフレーズを考案するやり方において、クレーラーの業績は、ミハイル・フォーキンのそれを比肩されることが多い。しかし、新旧様々な舞踊形式を採用し、それらを筋立てに沿って効果的に配した点で、クルト・ヨースに代表される次世代の劇場舞踊の手法を先取りしている。さらに、照明プラン、空間配置も手がけることによって、クレーラーは作品の諸部分が有機的に関連し合うよう腐心し、演出家としての手腕を発揮した。

1929年エッセンの第二回舞踊会議で表明されたクレーラーの見解は、『ヨセフ伝説』で見られたような、彼の舞踊の諸形式に対するニュートラルな姿勢を裏付けている。「言語的に混乱した一時期を後にして、芸術舞踊において、一つの言語共同体が、ただ種々様々な方言とともに再び形成されるであろう。」この発言には、言語に準ずる表現媒体、かつ普遍言語としての彼の舞踊観と、舞踊の新旧論争に始まるモダン・ダンスとクラシック・バレエの対立を、上に挙げたような舞踊作品の実現化に向けて昇華しようとする意図を読みとることができる。

当時のオペラ・ハウスの外では、後にアメリカで発達したモダン・ダンスの純粹主義的傾向に、舞踊史構築の際接続されることになる、筋を放棄した作品上演（絶対舞踊）が、モダンを冠してさかんに行われていた。クレーラーの唱えた【近代的】コレオグラフィーとは、これに対抗し、筋という伝統的な鑑賞の枠組みに基づきながら、上に挙げたような新機軸を打ち出すことによって、近代的＝同時代的たろうとしたものである。ベルリン、ミュンヘンの上演は、その個々の要素において（例えば照明、舞台美術）、今日の観点から興味深い、同時代モダニズム芸術とのつながりを示している。しかし、そのウィーン上演の顛末は、クレーラーとシュトラウスの、バレエの近代化構想のずれを明確に表している。この音楽監督は、「音楽、装飾、踊り子」という観賞基準を手放そうとしないオペラ・ハウスの観客に作品成功の照準を定め、ベルリン、ミュンヘンでの表現主義的な色合いを払拭するような衣装と舞台美術によって、『ヨセフ』を、ウィーンで根強い人気を持つバロック的なバレエの伝統に回収した。この処置によって、クレーラーのウィーンでの活動（正式契約期間は1923年—1926年）は、今日の視点からは、観客における成功との乖離のうちに、芸術的な新領域を開拓することを志向する、モダニズムの芸術家との舞台実験の可能性をも失った。しかしながら装飾バレエ路線は、財政難の中莫大な費用を要して知識人の非難を浴びながらも、観客的な成功というシュトラウスの当初の目的を果たし、クレーラーの協力により、前後50年に類を見ないバレエの興隆期をウィーンに迎えたのである。